

平成28年度スーパーグローバル大学創成支援プログラム委員会
議事概要

日時：平成29年2月20日（月）10:00～12:00

場所：弘済会館 4階 「菘」

出席者：（委員）明石委員、浦野委員、小野寺委員、梶山委員、木村委員、
眞田委員、中村委員、マルクス委員
（文部科学省）松尾大臣官房審議官（高等教育局担当）、
塩見高等教育企画課長、田浦国際戦略分析官、
堀尾高等教育企画課国際企画室室長補佐
（日本学術振興会）家理事、西川監事、京藤監事、長澤人材育成事業部長、
清水人材育成事業部企画官（大学連携担当）

議題

（1）平成28年度フォローアップ結果について

【質疑応答】

（木村委員長）何かお気づきになったことがありましたら、お願いします。私も数字、数量で出てきている結果だけはチェックしましたが、なかなか全てがうまくいっている大学というのはなさそうです。この大学であれば、これぐらいできているのではないかなと思うところが意外とできていなかったりして、中間評価の実施に向けて、いろいろと考えなければいけないことがあるのではないかと感じています。

（中村委員）全体として大変順調に推移しているようで、各大学の努力のたまものだと思います。私が今日、特に注目したかったのは、英語で全部単位が取れるのかということです。最近、インドにJSTがオフィスをつくって、向こうの方々といろいろ交流している中で、イギリスやオーストラリアなどとは違い、どうしても日本に行くと、1年ぐらい日本語を勉強しないとコースに入っていけず、このハンディキャップのためにインドの優秀な人が日本へ留学しないのだと聞きました。しかし、この感じでこれからぐっと伸びていけば、非常によろしいのではないかと思います。

（木村委員長）英語でのコースが始まったのはかなり前です。私も東京工業大学におりまして、かなりプロモートしましたが、なかなかうまく行きませんでした。しかし、今まで停滞気味だったのが、本事業でかなりはずみがついたような気はします。

（梶山委員）10年間という非常に長い事業期間が設定されています。そうすると、最初に設定したことを10年間守るというよりも、10年間の中でもっと社会インフラなどが進めば、必要でない部分が出てくることもあり得るのではないかと思います。

例えば英語が必要であることは誰でも分かっていますが、国際会議等に出ると、最近は手に持っていれば、英語から日本語、日本語から英語に訳してくれるものがいくらでもあ

ります。そうなる、その時間をもう少し論理的な思考に回せないのかという気がしています。学会に出ていても、かなり論理的な質問をされると戸惑っている方を見ますから、チャンスがあれば、最初に設定して10年ということではなくて、社会の変化や科学の発展等を考慮しながらというのも、どこかで必要ではないかという気がしています。

(木村委員長) 大変重要なポイントだと思います。10年間というスパンで、いろいろ変わってくるものがあります。その結果、目標を見直す、ミッションステートメントを見直す必要が出てくる大学もあるようですので、そのような方向は探りたいと思っています。

(浦野委員) ナンバリングについてお伺いしたいと思います。学生の勉強のしやすさという点から見ると、この部分はかなり大事なことだと思いますが、平均的に見るとすごい進捗ですけれども、一方で全く進捗が見られない大学も散見されます。これだけ動いていない大学が散見されるというのは、何か特別な理由があるのでしょうか。

(堀尾室長補佐) 個々の大学のことは分かりませんが、この後ご議論いただく中間評価の中で大学から調書を出していただくこととなります。そこでどのような課題があるのか、また、その課題に対してどのような方法が効果的なのかというところについて、評価部会の先生方からご助言をいただければと思っています。

(小野寺委員) 教職員に占める女性の比率について、職員は目標を大きくクリアしていますが、一方、教員の方は残念ながら目標に達していません。ナンバリング実施状況・割合についても同じなのですが、達成できているもの、できていないものについて、特にできていない場合になぜかというバックグラウンドについて、何かお考えがあったら教えていただければと思います。

(松尾審議官) 現状として詳細な分析はしていませんが、総じて申し上げると、職員の場合は女性の採用が多くなってきているのが現実だと思います。教員に関しては、やはり工学系中心だと、なかなかないということがあるのではないかと思います。

一方で、徐々にですが、実は教員も増えてきてはいます。実際、数字で見ると、大学の中での教員に占める女性の割合は24%ぐらいです。ただ、一方で企業における研究者の女性比率は8%で、日本全体で総じて言うと14%です。それは世界で見ると半分ぐらいなのですが、なぜかという、理学部、工学部に進学する女性の学生がまだ少ないというところがあります。それは徐々に増やしていかなければいけないのですが、教員になるまでの数がまだなかなか増えないというのが現実だと思います。最近では大学でも女性枠をつくっていますが、まだまだ浸透していないところがあるので、そこは分析したいと思っています。

先生がおっしゃるように、よいところと悪いところの分析をした上で展開していくことが重要だと思いますので、そこは引き続きやらせていただきたいと思います。

(木村委員長) 本事業が始まってからデータの方は出してもらっているのですが、文部

科学省はその結果についてインターフェアしておりません。来年度は中間評価ですから、その時点でその辺のことを大学に聞くと、おそらくいろいろなことを書いてくるのではないかと思います。それに期待したいと思います。

(梶山委員) ナンバリングのことに話を戻させていただきますが、そもそもナンバリングとは何かという話です。学内でカリキュラムの管理や学生の授業の取り方の管理としてナンバリングをすることも必要ですが、もともとナンバリングというのは留学生が入ってくる、それから国内でも日本人が流動化することを手伝うという状況で、学生を指導するために必要なものだと思います。

例えば留学生が来て、外国との間のナンバリングがきちんとしていれば、同じような科目を二度も取らせなくて済むような形で指導ができます。それから、学生の流動化を促すためにそもそもナンバリングがあるのだと思います。

ですから、ナンバリングを学内の成績管理や授業管理に活用する、あるいは自大学と学術交流協定を結んでいる大学との間ぐらいであれば大学同士でも可能ですが、世界的なものになると、それなりのきちんとしたところにやっていただかなければ、多分できません。非常に大変ですけれども、最終目標はそこだと思いますので、いずれ考えながらやっていただければと思っています。

<委員了承>

(木村委員長) ありがとうございます。それでは、この議題については以上とさせていただきます、次に進みたいと思います。

(2)「スーパーグローバル大学創成支援事業」に対する中間評価について

【質疑応答】

(木村委員長) 評価していただく先生方は大変ですが、これを読めば大筋のところはご理解いただけるとと思います。この点は加えた方がよいとか、これは要らないのではないかといったご意見がありましたら、お伺いしたいと思います。いかがでしょうか。

これだけの資料を短時間でご説明いたしましたので、ご理解いただくのはなかなか難しいと思いますので、後ほどご意見等がありましたら、事務局までお申し出頂きたいと思えます。それらを勘案して全体の評価方法を考えさせていただくことにしたいと思えます。スケジュールを確認したいのですが、4月には発送出来ますか。

(堀尾室長補佐) 調書を作る時間、そして大学から出てきたものを評価部会の先生方に読んでいただいて評価をいただく時間を考えると、遅くとも4月の初めには発送しないといけません。

(木村委員長) では、2~3週間ぐらいありますね。よろしくお願ひします。

その他、特に伺っておくことがありましたら、ご発言いただきたいと思います。

(小野寺委員) 中間評価調書の成果指標データ集を見ると、先ほど私が質問したことと関係しますが、教職員に占める女性の比率において、教員に占める割合と職員に占める割合は明記されていますけれども、この教職員というのは当然、外国人教員等も含めた数字ですか。

(清水企画官) そのようになります。

(小野寺委員) なぜそのようなことをお伺いするかというと、おそらく教員の女性比率にしろ、外国人留学生の女性比率にしろ、日本と海外ではかなり違うのではないかと考えているのですが、こうやって全体で見てしまうと、そこが全く分からないような気がするのです。例えば海外留学する日本人学生の女性比率は、結構高いのではないかと考えているのです。

(木村委員長) 個人的に調査したことがあるのですが、英国のロンドン大学の、1年の修士コースについては、日本からはほとんど女性でした。

(小野寺委員) 一方、外国人留学生の方も女性比率が比較的高いのではないかと考えています。そうすると、全学生に占める女性比率と留学生の女性比率は全く違っているということが、本当は問題の一つではないのかと思います。そういうところの数字が、これだと読み取れないのではないかという気がしました。これは実際に文科省なりでご検討いただいた上で、数字をどうするかということをお考えいただければよいと思います。

(松尾審議官) 検討させていただきます。

(木村委員長) 非常によい御指摘だと思います。確かに総数で見ると、特性が出てきませんね。おっしゃるとおりだと思います。

他に何かございませんか。外国人留学生について、先ほどの5月1日のデータで男女比率等は見たことがありませんが、ありますか。

(松尾審議官) 外国人留学生の5月1日時点のデータというのは、歴代ずっとJASSOで取っているデータなのですが、男女は取っていなかったかもしれません。少なくとも歴年のものは分からないので、ここから先、どう取っていくかというのは少し工夫をしたいと思います。

(清水企画官) 留学生に占める男女別というのは、これまで採択大学で作成してなかったデータなので、このたびの中間評価でいきなりそれを追加すると、それをやる大学の方がかなり厳しいのではないかということがあります。

(木村委員長) 厳しいというのは、新たに調べなければいけないからということですか。

(清水企画官) その可能性があります。

(松尾審議官) 参考値として入れることはできるのではないのでしょうか。

(木村委員長) 参考値でよいと思います。今から大規模な調査をするのは大変かもしれませんが、できる範囲で、データを出してもらったらどうでしょうか。是非お願いします。他にありませんか。よろしいですか。

<委員了承>

(木村委員長) それでは後でご意見をいただけることを期待して、それも含めて、事務局で取りまとめたと思いますので、よろしくお願いします。ありがとうございました。

その他

【質疑応答】

(明石委員) 海外有識者意見交換会についての質問です。実施方法について、海外といっても、実質的にはアメリカのみですね。学長経験者というのは現学長とともに元学長も含むのでしょうか、問題によっては学長よりもプロボスト、学務担当の副学長の方が適切ということもあるでしょう。それからアメリカの場合、私立大学の比重が極めて高いのですが、州立大学等もその中に加えるという配慮をするのか、とにかく大事なのは実りある意見交換にすること、率直なコメントをもらうことです。しかも、アメリカの大学はそれぞれの特徴によって、我々にとっての重要性も変わってくるでしょうから、いろいろな配慮が必要だと思います。

(堀尾室長補佐) いただいたご意見を踏まえて、これから調整していきたいと思います。

(木村委員長) 今、どのぐらい進んでいるのですか。

(堀尾室長補佐) 在米大使館の方と調整しながら、候補者を検討しているところです。

(明石委員) アメリカの場合、小さいリベラルアーツの大学が多く、200 くらいあると推定されます。そういうものも配慮をすべきかどうかということですね。

(堀尾室長補佐) そこもまだこれからというところになります。目的としては、日本でいくらスーパーグローバル大学として国際化を進めても、海外でプレゼンスを上げていかないと、よい留学生も入ってきませんし、海外での知名度も上がっていきません。実際にアメリカではどう受け止められているのかということも含めて、意見交換をさせていただければと思っています。

(梶山委員)　そもそもの国際化の意味ですが、いろいろな切り口があると思います。例えばスーパーグローバル大学に採択されて、短期間の語学研修をものすごく増やしているところがあります。そういうものを国際化と言うべきなのか、やはり国際化の切り口をきちんとしなければならないと思います。最終的には日本の大学のレベルが上がるということが国際化の一番重要なことだと思いますから、数を増やせばよいという仕掛けではないような気がします。特に短期の語学研修は、やはり大きな大学では、そういうことで国際化になっているという評価はやめてほしいと思います。それが非常に強調されて、人数になると短期も長期も分かりませんから、国際化の切り口についていずれ議論してほしいという気がします。

(木村委員長)　おっしゃるとおりだと思います。

(明石委員)　今のご発言に私も非常に同感です。多様性の導入ということは理解できるのですが、国際化というのは非常に難しいですし、トランプ大統領の出現やイギリスのEU離脱、それから今年、ヨーロッパで次から次に予定されている選挙等を見ても、むしろ国際化・グローバル化に対するブレーキがかかり、反省が行われるという可能性が極めて強いです。我が国では非常に安易な形で国際化がいわれています、しかもこのような数式で進歩を測るということはますますこれを浅薄化しかねないので、そういうことについても難しさと、それが常に変わりつつあるということについて、我々は念頭に置く必要があると思います。

(中村委員)　この海外有識者意見交換会は、アメリカの有識者をお呼びするというのは、当然、やるべきですし、我々の何周か先を行っていると思います。しかし、片方で我々に対して熱烈な期待を持っているアジア、アフリカの先生方等、ニーズを持っているところの有識者も加えられないかと感じました。それはもともとの趣旨に反するのでしょうか。

(木村委員長)　その辺も是非考慮していただきたいと思います。梶山先生、明石先生がおっしゃったことには私も全く賛成なのですが、ただ、まず第一歩としてこのようなデータを見ることは意味がないわけではないと思っています。日本人はどちらかというと同じことをずっとやっていく国民だと私は思っていますが、こういうものを長く続けていけば、いろいろなユニークな試みが出てくるのではないかというのが私の期待です。中間評価のために現状について各大学に報告書を出してもらって、お互いがそれを見て、「なるほど、こういうグッドプラクティスがあるのだ」ということで進んでいければよいと思います。

(梶山委員)　明石さんがおっしゃったダイバーシティですが、いろいろな切り口で見るといえるので、私は先ほど英語研修に行くのは国際化と言わないでほしいと言いましたが、英語研修に行くことは非常に重要なことです。そこから今まで経験したことのない外国での日常生活や大学の様子が分かりますから。今まで経験したことのないことにプラスアルファになる、それがダイバーシティの一つだと思います。「ああ、あのようなよいこ

とをやっているのだ」ということに気付くのが、教育のイノベーションだと思うのです。ですから、語学研修に行くことをどういう切り口で見るかです。ただ行って2週間過ごしたのではなく、そういう新しいことに学生が気付いてくれたという見方をすれば、本当の国際化に役立っているということがよく分かります。そういうことを言いたかったのです。

(木村委員長) ありがとうございます。それでは、この件はよろしいでしょうか。

<委員了承>

(木村委員長) いろいろご意見をいただきましたので、それらを勘案して今後の進め方について考えさせていただきたいと思います。ありがとうございます。

以上で公開の議事は終了とします。以降は委員の選考に関する審議を行いますので非公開と致します。誠に恐れ入りますが、傍聴者の皆様にはご退席下さい。

傍聴者退出

(3) 評価部会委員の選考について

(非公開議事のため未掲載)

議事終了